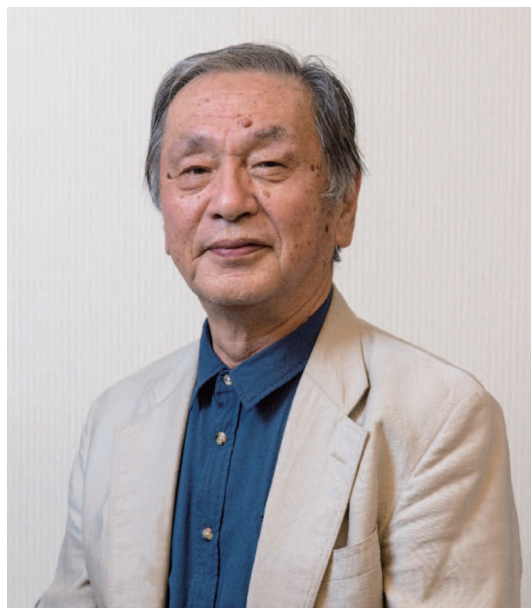


## 越前・若狭の古建築研究と実践教育

建築学科 S46 年卒業 吉田 純一 氏

### プロフィール

- 1967 (S42) 年 藤島高校卒業
- 1971 (S46) 年 福井大学工学部建築学科卒業  
東京工業大学大学院入学
- 1976 (S51) 年 同 大学院博士課程 単位取得満期退学  
同 建築学科助手
- 1986 (S61) 年 福井工業大学に着任
- 2000 (H12) 年 同 教授  
建築学科主任、学生部長、図書館長を歴任
- 2014 (H26) 年 同 FUT 福井城郭研究所所長
- 2019 (H31) 年 福井工業大学退官
- 現在 FUT 福井城郭研究所顧問、工学博士



### 【編集にあたって】

吉田先生には前号でも特別寄稿をお願いし、執筆いただいた。「40余年間に及んだ謎解き ～私の丸岡城天守研究歴～」というタイトルでミステリー調のものであった。天守の柱に残された一つの墨書から建築年代を特定したという筋書きに、思わず惹きこまれた。

今回は「プロジェクトX・福井大学版」の執筆をお願いしたところ、「私は大学教員としての経歴の中で皆様で紹介できるようなものがあるのか、これまでの私の研究を中心としたものでなければ…」と、引き受けていただいた。ご多忙の中、時間を割いて執筆賜ったことに深く感謝し、心より厚くお礼申し上げます。

先生は山あいの集落のプロジェクトに携わり、「総務省ふるさとづくり大賞：内閣総理大臣賞」を見事に受賞された。石川県境の標高500メートルの山間部にある勝山市小原集落の再生・活性化プロジェクトで、「小原ECOプロジェクト」と名付けられた。

地元の住民と協働し、また夏休みに学生たちを引き連れての現場は、まさに“福井工大版ダッシュ村”と呼ぶにふさわしい。平成18(2006)年夏からスタートし、現在も続いている長期プロジェクトで、先生は退官するまでの13年間携わられた。その奮闘の様子をじっくりとお読みください。

さらに、福井城本丸御殿の遺構を市郊外の離れたお寺の中に見つけ出されたという後半の部分は、先生の熱い想い・探求心が報われたものである。心より敬意を表します。

末尾に、吉田先生には工業会の本部理事、坂井地区長としてもお世話いただいていることを申し添え、重ねてお礼申し上げます。

(第73号工業会誌編集委員会)

私の専門分野は日本建築史。神社や寺院の建築、武士の城郭や住宅、庶民の民家や町家など、日本の歴史建造物がその対象で、これらがどのようにつくられ、発展してきたのか、そして歴史的に、あるいは現代においてどのような意義を持ち合わせているのかなどについて解明していく学問分野である。未来に向かって新たな技術を追い求める工学系プロジェクトとはかけ離れている気もするが、私がこれまでに実践してきた建築教育と研究の一端を紹介したい。

## 日本建築史研究の道へ

### 1. 日本建築史との出会い

昭和42年(1967)4月、「世の中や人のために役立つ建築を創りたい」との夢や希望を抱きながら福井大学工学部建築学科へ入学した。今から54年前の昭和42年4月のことになる。もともと歴史に興味、関心があった私は、五十嵐先生の「日本建築史」や渡部先生の「西洋建築史」あるいは岡田先生の「建築意匠論」などの講義に出会い、次第に建築史への興味や関心を強めていった。設計課題において私よりもはるかに豊かな発想や造形力をもつクラスメートの作品をみて、自分は設計に向いていないとの思いが強まっていたのも事実であったが…。卒論のテーマは「禪と建築」。今にして思えば、大それたテーマであるが、日本の建築を建築論や思想的に解明したいとの思いであった。

当時の建設業界は大盛況で、就職先は引く手あまた。クラスメートの多くは、4～5月に次々、鹿島、清水、熊谷など大手建設会社への内定を得ていた。私は日本住宅史研究の第一人者であった平井聖先生の指導を受けたく、東京工業大学大学院進学を目指した。入学試験は10月初めで、就職が決まって卒研に取り組むクラスメートたちを横目にドイツ語などの受験勉強に励んでいたことが懐かしく思い起こされる。

### 2. 東京工業大学平井研究室

昭和46年4月、運良く東京工業大学大学院に進学できた。当時の研究室には平井先生の下に助手の

河東義之先生、院生は博士課程の八木清勝・後藤久太郎・斎藤英俊の3人と修士課程に4人いた。卒研生はわずかに2人だけ。最初のゼミで、卒研の「禪と建築」について発表したところ、諸先輩から厳しい質問や問題点を指摘された上、平井先生は「僕だったら卒業させていないね」と一言。先生は笑っておられたが、今振り返ると、私の勉強不足、研究能力のなさにあきれ果てた笑いであったと思う。

先生および諸先輩と同じ研究室で毎日を過ごす中、建築史の知識はもちろん、研究に対する姿勢や考え方を学ぶことができた。手書きの時代で、先輩の論文の清書に明け暮れた日々もあった。提出した論文が何日たっても先生の机の上に置かれたまま、こっそり取り下げ、書き直したこともしばしばあった。

当時は全国的に町並み調査の最盛期で、今日兼六園とともに金沢の観光の目玉になっている東の茶屋街の調査を行った。私も現地の旅館に泊まり込み、先輩たちの指導を受けながら120棟に及ぶ町家の平面や断面、立面の調査に関わった。群馬県の近世社寺調査や栃木県の近世民家調査にも参画、神奈川大学西和夫先生や横浜国立大学関口欣也先生の調査に加わったこともある。修士論文は「柱寸法にみる近世上層民家の編年に関する研究」。近世武家住宅で設計体系の基準になっていた柱寸法に着目し、民家の中に床や棚・書院をもつ座敷が成立する経緯や建築年代の解明を試みたもので、畿内の大阪、奈良、京都、滋賀から北陸の福井、石川、富山の各府県に点在する代表的な民家を調べ歩いた。今日のようにナビもなく、五万分の一の地図を頼りに車を運転しながらの調査であった。博士課程1年の夏に2か月余、奈良平城京の発掘調査に加わったことも貴重な体験になった。

### 3. 『内匠寮本』の整理

平井先生は長年にわたって宮内庁所蔵『内匠寮本』の整理をされていた。『内匠寮本』とは、慶長度から安政度まで江戸時代8度に及ぶ京都御所の内裏・御所造営を担当した京大工頭中井家(中井役所)が作成した大量の指図や帳簿である。博士課程に進んだ際、私も同行を許され、毎週火曜日、宮内庁書陵部に出向いた。指図や帳簿の文字は崩し字で、当初は全く読めなかったが、書陵部嗣永氏の指導を受



け、そのうちにほどほど読めるようになった。後藤さんの手ほどきで4×5インチ大型カメラの操作も覚え、フィルム現像処理も任せられた。『内匠寮本』の整理に関わったことで、江戸時代の生の史料に触れることができ、崩し字の解読や写真技術も身に付けることができたのである。これらは近世建築の調査や研究に欠かせない知見や技術であり、私にとって大きな武器になったことは言うまでもない。

昭和51年3月、博士課程を終えたが、翌4月には小山高専へ栄転された河東先生の跡を受けて助手に採用された。博士号は未取得、平井先生のご配慮があったと思っている。10年に及んだ助手時代は、研究の傍ら設計製図の手伝いや修士生や卒研生の調査や研究の手助けを行い、学生教育の面でも得るところ大であった。

この間に博士論文もまとめ、提出できた。『京大工頭中井配下の棟梁層の成立過程と組織化に関する研究』と題するもので、「内匠寮本」中井家文書の指図や帳簿を解読しながら京都御所造営に関わった棟梁の成立や、彼らがいかに組織化されていったかを論じたものである。

大学院と助手時代を合わせた15年間に及ぶ東京工業大学時代は、私のその後の研究や教育活動の礎となった。

## 福井での教育・研究活動

### 1. 環境の違いに驚く

農家の跡取りでもあった私は、昭和61年(1986)4月、福井工業大学に職を得て、15年ぶりに故郷福井へUターン。同じ大学とはいふものの、東工大と比べると、研究・教育環境のあまりの違いに驚嘆、焦りも覚えた。与えられた研究室は4m×5mほどの広さで、環境分野の先生との相部屋。その先生はほとんど実験準備室にいたることが多かったが、広さは平井研究室の5分の1以下。担当する講義も週10コマ程度、多い時には15、6コマもあり、講義がない日はほぼ皆無。初年次に配属された卒研生は7名であったが、その後は10名前後が普通で、最大15名の年もあった。これら一人一人に個々の

テーマを考えるだけでも一苦勞であった。東工大時代のように、研究室にじっくり腰を据えての研究はほぼ不可能、研究費は学科全体で等配分され、年間10万円にも満たなかった。また、これまで建築史関係の先生は在籍しておらず、図書館には日本建築史研究のバイブルともいえる『修理工事報告書』はもちろんのこと、建築史関連の研究書や文献はほとんどなし。私が持ち帰った方が多い有様であった。

こうした環境の中で本格的な研究活動は無理と考え、まずは講義や卒研を主眼にした教育活動に重点を置こうと決断した。国立よりもはるかに高い授業料を納めている学生のためにも講義に力を注ぐ。その傍ら、土、日や休日に県内の古建築を探し求め、埋もれている古建築を探し出していこう。これが地方の大学の使命のひとつであると自らに言い聞かせた。

### 2. 講義の工夫

担当した講義は専門の日本建築史の他、西洋建築史や設計製図、建築計画、庭園論など専門外の科目もあった。どの講義も入念に準備したつもりだが、受講生が100名を超す大教室での講義や私の不慣れも相まって期末試験の結果はどの科目も無残なもの。学生の多くはほとんど理解していない。ある年の日本建築史の講義では約120名の受講者のうち80余名を不可とした。すると、教務課から「本学の学生にあった講義をするように」とのお叱りが…。これをきっかけに教えるからいかに理解してもらえるか、講義方法や内容を転換した。できる限り学生に寄り添い、発言を求めたり、前に出て黒板にかかせたり。また期末試験をなくし、小テストを数回に分けて実施したり。大学の講義とはいえないかもしれないが、日ごろの勉強や自ら考える力の大切さを伝えるとともに学生の勉強意欲を高め、理解を深めるよう努めた。

### 3. 卒業研究とその成果

4年になって研究室へ配属された卒研生に対しては、可能な限り調査に連れていき、平面や立面の実測や細部のスケッチなどを課し、直に建築に触れさせながら理解を深めるよう努めた。他の研究室では共同研究が多かったが、私の研究室では1人1テーマを原則とし、それぞれが考え、まとめ上げる訓練

をさせたかったからである。着任当初は、卒研のテーマを探し求めて学生と一緒に土、日や休日に県内各地の古建築を探し求めて歩き回ったが、そのうちに調査の依頼も受けるようになり、卒研テーマ探しはやや楽になった。そして学生に自信をもたせるため、卒研の成果をできる限り、建築学会北陸支部大会で発表させることにも努めた。当時、支部大会に発表しない先生もいた状態で、福井工業大学では画期的なことであった。これが後に学会で論文発表をする学生に対して旅費を補助する福井工業大学独自の制度を生み出すことにもつながった。

昭和61年の着任から10年間の卒研の成果は、「福井の古建築あれこれ」として題して、平成5年11月から平成7年8月に朝日新聞福井版にほぼ週1回の割で50回連載、さらに続く10年分は平成16年4月から17年3月にやはり同新聞に「越前・若狭、古建築探訪」と題して40回分を連載した。

この2つの連載はそれぞれを冊子にまとめ、前者は平成7年9月23日に開催された吉研創立10周年記念パーティの席で、後者は平成17年11月7日の吉研創立20周年記念パーティの席で、全国各地から集まってきた卒業生たちに渡すことができた。宴会の席上、これを肴に学生時代の思い出話に花を咲かせているテーブルもみられた。この2つの連載は県内各地の古建築を取り上げており、県民にも広く古建築の存在を知らしめることにもなった。



「福井の古建築あれこれ」



「越前・若狭 古建築探訪」

## 小原 ECO プロジェクト

～学生による限界集落の再生、活性化活動

おおよそ50年に及ぶ私の教育、研究活動のなかで、唯一、プロジェクトを冠するのが「小原ECOプロジェクト」である。地元民と協働し、廃村の危

機が迫る勝山市小原集落の家屋や集落、周辺環境を整備、再生し、山村生活を体験できる場、自然と触れ合える場として活性化させようとする試みである。平成18年にはじまり、現在も継続中である。このプロジェクトには多くの学生が関わり、建築実践教育の場として、学生たちの人間教育の場にもなっている。

### 1. プロジェクト設立の背景

小原集落は、勝山市の最北東端、石川県境の標高500メートルの山あいにある。



小原集落（平成20年頃）



家屋破損状況（岩本豊家）平成16年頃

平成15年から同17年まで3年間、市の依頼を受けて市域の歴史的建造物の調査を実施。小原集落の家屋と集落調査はその一環として平成16年夏に行った。滝波川の谷沿いから北側の山の斜面にかけて30余棟の家が点在していたが、人が常住する家はわずか5戸のみ、他はすべて空き家で、崩れかけている家やすでに倒壊してしまった家もあり、廃村間近の状況であった。

明治期の記録によれば、この一帯に90余棟の家が存在し、多くの家々が山の斜面にぎっしり建ち並んでいる古写真も残されている。

当地は県内でも有数の豪雪地帯で、積雪は4、5mに及ぶのが普通。特に昭和38年のいわゆる「三八





小原集落古写真

豪雪」には村全体が孤立した。特にこれ以降、離村が相次ぎ、集落が廃れていったという。調査後もこの傾向は続き、現在の村人はわずか1人、家屋の数も10数棟に減っている。

個々の家屋は、小石や枝木混じりの荒々しい土壁を塗り込めた大壁造、2階にはベランダ状のウデギが付いていて、隣接する白山麓の民家に似ている。

手前の木根橋集落にも似たような家屋が散見するが、これより南の集落にはこの形式の家屋はみられない。越前の民家研究にとって、あるいは加賀白山麓文化との関連性を探る上でも興味深い。これらの家屋が川沿いから山の中腹まで約40メートルの高低差がある山肌にへばりついている集落景観も見ごたえがある。調査後、機会があるごとに小原集落の重要性や保存を訴えていた。

そのころ地元では、小原集落から出た國吉一實氏や杉吉政巳氏が中心となり、生まれ育った集落の衰退を見兼ね、何とか再生、活性化させようと模索していた。平成18年春に勝山市で講演した際、國吉・杉吉両氏と出会い、お互いの思いを吐露する中で、小原ECOプロジェクトの立ち上げが決まった。善は急げとばかり、その年の夏季休暇から作業に取り掛かることになった。

昨今では大学や学生が地域民と協働しながらまちづくりや地域の活性化を進める事例は各地で数多くなされているが、当時は全国的にみても稀有な事例であった。大学当局も事故やケガを恐れ、学生の学外活動にはあまり乗り気でなかった。学生たちには

■これまでの修復作業の経緯

修復年	家屋	改築内容
平成18年	2006 ①岩本豊家住宅	屋根(瓦葺から金属板葺へ、外部、内部) *ウデギは平成21年に修復
平成19年	2007 ②岩本了蔵家住宅	外部、内部
	③西山三喜造家住宅	屋根(金属板葺へ)
平成20年	2008 ④北山保夫家住宅	屋根(金属板葺へ)、外部
平成21年	2009 ④北山保夫家住宅	内部
平成22年	2010 ⑤岩山信子家住宅	後補増築部解体
平成23年	2011 ⑤岩山信子家住宅	外部
	⑥道場誓家住宅	外部、下屋再建
平成24年	2012 ⑥道場誓家住宅	屋根(瓦葺替え)
平成25年	2013 ⑥道場誓家住宅	内部
	⑦岸下家住宅	屋根(瓦葺替え)
平成26年	2014 ⑦岸下稔家住宅	外部(北・西面)、下屋根(金属板葺替え)
平成27年	2015 ⑤岩山信子家住宅	屋根(瓦葺替え)
	⑦岸下稔家住宅	外部(南面)
平成28年	2016 ⑦岸下稔家住宅	内部(1階)
平成29年	2017 ⑦岸下稔家住宅	内部(2階一部)、外部(東面)、ウデギ再建
平成30年	2018 ⑦岸下稔家住宅	内部(2階全部)、ダイドコロ整備
令和元年	2019 ④北山保夫家住宅	外部(東面)
令和2年	2020	*新型コロナウイルスの影響により活動休止
令和3年	2021 ⑥道場誓家住宅	外部(1階南面)
その他		
平成22年	2010	休憩所新築
平成27年	2015	⑤岩山信子家・⑦岸下稔家間の除雪用スロープ設置、④北山保夫家2階への渡橋
平成28年	2016	ピザ窯製作
令和3年	2021	スロープ、④北山保夫家2階への渡橋補修

人気グループTOKIOのテレビ番組「ダッシュ村」にあやかって「工大版ダッシュ村」と自称して参加を募ったりもした。

私は大学を退官した平成31年まで13年間関わり、退官後は多米淑人教授が引き継ぎ、現在も継続中で、今年は17年目を迎えることになる。ちなみに多米教授は吉研17期生で、平成15年の小原調査にも参加し、院生時代の設立当初から國吉・杉吉両氏との連絡や作業の準備、現場での作業責任者として関わり、当事業のベテランでもある。

2. 大工さんと参加学生

設立の際、地元の人たちは山林の整備、赤免山や大長山への登山道の整備などおもに周辺自然環境の保全や整備を担当、我々福井工業大学チームは家屋の修復や改修と集落景観の整備を担当することにした。しかし、作業開始以前に2つの大きな課題に直面。一つは作業に協力してもらう建築技術者、大工さんの確保、一つは学生の動員である。



前者については、昭和61年の帰福直後に知り合い、その後も懇意にさせていただいている東洋建匠の中間眞佐博氏に相談したところ、二つ返事で快諾を得た。彼の息子の政則君が私の卒研生で、卒業後も父といっしょに仕事にあたっていることも幸いした。中間氏は常々「俺の1年は11か月、8月は小原にいる」と口にし、現在も変わることなく協力を得ている。作業中の技術指導や心構え、注意事項はもちろん、体験談や人生訓は学生たちの人間教育にもなっている。

後者の学生動員に関しては、研究室の卒研生は、木造建築や歴史的建築に興味や関心がある者が多く、ほぼ賛同し参加してくれるが、研究室以外の学生には夏休みがつぶれる、暑い中での作業はいや、バイト代なし、などの理由で毛嫌いされ、当初はなかなか動員できなかった。講義や学内掲示などで「工

大版ダッシュ村」活動を紹介したり、新聞やラジオ、テレビで報道されるうちに研究室以外の学生たちの参加も得られ、多い年には20名を超えることもあった。オープンキャンパスにやってくる興味をもち、入学後から卒業まで4年間連続で参加する学生も現れるようになった。千葉県出身のM君や県内のT君はこの例で、2人は在学中の活動が評価され、理事長賞を受賞して卒業していった。神戸の大学生や福井高専生など他大学から学外研修活動として参加した者もいる。ちなみに16年間で小原ECOプロジェクトに関わった学生は延べ200人を超えている。

### 3. 建築実践教育の場

これまでに改修した家屋は7棟、平成22年には小規模ながらも1棟の休憩所を新築した。修復家屋7棟のうち、2棟は瓦屋根から金属板葺への葺き替



岩本豊家の改修



改修後の岩本豊家



作業風景（内部）



作業風景（左：瓦葺き替え、：外壁）



えや外壁板の張替えにとどまっている。残りの5棟は内部も改修し、瓦の葺き替えや外壁土壁の補修も行なって居住可能、作業時には打ち合わせに使用したり、学生たちの宿舎になっている。

特に最初に手掛けた岩本豊家は、集落の中ほど、村道より15メートル程の高台にあり、集落景観上も重要な家屋である。桁行6間、梁間3間程度の比較的小規模な2階家であったが、写真のように破損は相当なもの。しかも空き家になってすでに15年ほど経っていて、二階のウデギは崩れ落ち、瓦葺きの屋根はシートで覆われていた。内部も床板が湿気でめくれ上がり、壁板も剥がれ落ち、その上着物や洋服、鍋や茶碗などの生活用品が所狭しとばかりに散乱、床下には味噌桶がそのまま置かれて、異臭を放ち、数十本の酒瓶も転がっていた。着の身、着のままの離村であったようだ。作業のスタートはこれらの生活用品を下の道脇にある廃棄場所まで運び出すこと。一人一人が通るのがやっとくらの坂道を何度も往復、運び終えるのに4、5日を要した。「僕は引っ越し作業に来たのではないのに…」。学生たちの苦情も耳にした。

初めのところは外壁や内壁の板張り作業が主であったが、簡単そうにみえても下地の木摺の取りつけが悪いときれいに貼れない。中間さんから木肌の木目や色合いを考え、かつ木表と木裏、元と末を見極めて張るよう注意をされても言葉は知っていても実際には見分けがつかず、直に教えられてようやく理解する。板張り作業だけでも大学の講義では得難い、まさに実践教育の場であった。

数年後には柱の根継や据付作業をしたり、瓦の葺き替えや外壁の土壁塗りなどの作業にも出くわした。小原の垂木は雪に備えて太く、6寸の釘打ちが必要である。学生たちは当初は苦勞するが、そのうちにコツをつかみ、難なく打てるようになる。大学ではほとんど教えない瓦の割り付けなども教わり、2棟の家屋は学生たちだけで葺き終えている。土壁の下地は本来、竹小舞であるが、小原では曲がりくねった枝木を縦横に組むため時には枝木が壁の表面から突き出、壁土にも小石が混じっている。壁土は以前に改修した家屋から出たものを練り直して用いたが、こてを使って塗ろうとしても粘りが足りない上に枝

木の小舞穴が大きく、うまく塗れない。やむなく壁土を直径10cmほどの球状に丸め、投げつけてみたところうまく塗れた。そして表面を素手できれいに均して仕上げる。地元の人によれば昔から同じような方法で壁を塗っていたという。これも当地ならではの実践教育である。

平成22年には我々の作業を聞きつけたある材木屋さんから提供された木材を利用して小規模ながらも休憩所を新たに建設した。前年の卒研でF君が基本設計を行い、これに若干の修正を加えてつくった。F君は木材の数量や寸法をチェックし、各材の用途決定、補足すべき木材などを割り出し、設計案をまとめて卒業。この案をもとに中間氏の指導の下で学生たちは基礎工事から柱建て、軸部の組み立て、梁架け、小屋組、屋根仕上げまで全作業を体験できた。建物の規模は小さいものの、これも大学内ではまず体験できない建築実践教育であった。



新築した休憩所

この休憩所は我々の休憩用に使われている他、雨の日には作業場や工具置場にもなり、毎年恒例のBBQパーティでの憩いの場にもなっている。ちなみに平成29年にはA君がこの脇に廃材の煉瓦を再利用してピザ釜をつくり、小原産のワサビ入りピザも味わえるようになった。

#### 4. 人間教育の場

小原での活動はほぼ夏季休暇の1か月間実施される。毎朝6時に起床し、6時半から朝食、作業は8時から2時間の昼食・休憩をはさんで午後6時ころまでの実質8時間。平日はこのスケジュールの繰り



返し。学生にとってはかなりシビアなスケジュールである。昼食と夕食は地元の人によって作ってもらえるが、日ごとに食事当番と洗濯係が割り当てられ、雑魚寝状態の合宿生活。テレビやラジオ、新聞はなく、以前は携帯電話も通じなかった。入村当初の2、3日は慣れない仕事やこうした生活にうんざり顔もよく見かけるが、徐々に順応していく。県外からの下宿生やアパート・寮生活の方が自宅通学者より順応は早そうであった。

休みの日曜は自由で、昼頃まで寝ている者もいれば、イワナ釣りに出かけたり、川遊びに興じるなど、山村生活を満喫する者もいる。鮑の刃研ぎなど中間さんの講習会が開かれたこともある。また、山奥といっても勝山市街まで車で15分、福井までも1時間程度であり、土曜の夜に福井の下宿やアパートに戻る学生もいるが、みんな月曜朝8時の作業開始時間までに戻ってくる。

こうした小原での共同生活を通して、相手を思いやる気持ちも生まれてくるようで、グループリー

ダーは疲れ気味の人や体調不良な人には軽微な作業を割り当てたり、食事当番や洗濯係の変更も指図している。また地元の人や見学者など、来訪者には作業中であっても顔を上げて大きな声で挨拶。これらのことは毎年、作業開始日に中間さんが常に言われていることで、学生たちは忠実に守り、実行している。

そしてほぼ毎年、お盆休みを利用して卒業生が2、3人連れ立って差し入れに訪れる。中には作業を手伝っていく者もいる。小原ECOプロジェクトは学生たちの人間教育の場にもなっているのである。

## 5. 地元民との交流

学生たちは平成24年からお盆に「小原篝火祭」を開催している。離村したとはいうものの、ほぼ毎日のように畑作業にやってくるお年寄りがおり、お盆には家族そろって墓参りに訪れる姿を目にしていた。離村者が一時でも集い、旧交を温め合う機会を提供しようと企画したのである。旧小学校跡の広場に建設用足場を組んで舞台をつくり、7基の篝火を焚き、集落内の坂道に200余の手作り行燈を並べ、集落全体をライトアップする。離村者への連絡は國吉・杉吉氏らにお願いし、多い時には60余名の参加者もあった。舞台での演目は、加賀宝生流師匠を招いての能舞(1、3年目)や県内で活躍している音楽バンド演奏(4、5年目)、地元の民謡や盆踊りの披露、カラオケ大会なども開催している。学生たちは裏方に徹し、手作りの焼そばやイワナの塩焼き、鹿肉、熊肉なども振舞っている。

我々の活動を見ようと見学者も見かけるようになり、平成28年からは「古民家DEカフェ」も開業。小原の水を使ったコーヒーやお茶を提供しながら小原集落の解説や我々のこれまでの作業の様子を紹介、解説している。



学生たちの作業風景



中間氏の指導風景



古民家 DE カフェ (道場家にて)

さらにここ数年は國吉氏の斡旋によって、毎年アジアや欧州から10数名の外国人が10日前後小原



に滞在し、日本の山村生活や日本文化を体験するツアーが実践されている。彼らは学生が改修した家屋に寝泊まりし、畳干しや障子の張り替え、集落内の小路沿いに流れる水路の整備、石垣の草取りなどを行い、冬場には雪かきやかんじきをつくり、雪中散策なども体験している。1、2回、我々の作業期間と重なった際には、家の改修作業を手伝ってもらった。昼食を共にし、夜にはパーティも…。学生たちは山奥の小原で国際交流も体験できたのである。

学生たちは小原ECOプロジェクトを通して多くの人との交流も行っているのである。



篝火祭 (外国の若者もいっしょに)

## 6. 受賞

こうした活動が認められ、総務省が主催する「平成27年度ふるさとづくり大賞、内閣総理大臣賞」を受賞、翌年2月1日、國吉氏らとともに首相官邸に招かれ、安部首相・高市総務大臣から表彰状を授与された。このほか、農林水産省「ディスカバー農山漁村(むら)の宝」優良事例、株式会社JTB交流文化賞 最優秀賞、地方新聞45社と共同通信社の地域再生大賞東海北陸ブロック賞を受賞、学術面でも日本工学研究協会賞と日本建築学会北陸支部「建築文化賞」を受賞している。



ふるさとづくり大賞表彰式

## 福井城本丸御殿の遺構発見

～建築推理学～

帰福して5年経った平成3年、市内の足羽山北麓にある瑞源寺の本堂と書院が元は福井城本丸の御殿であったことを突き止めた。それまで福井城に関わる建物は1棟も残っていないといわれており、発見のニュースは福井新聞をはじめとする地元の各新聞に取り上げられ、テレビやラジオでも報道された。この発見は私にとっても以後の研究活動を方向づける画期的なものになった。



瑞源寺本堂 (現在)

### 1. 瑞源寺本堂・書院との出会い

昭和61年に福井へ戻り、県内の古建築の調査とともに県立図書館に寄託されている「松平文庫」の絵図や文書を利用しながら福井藩主松平家に関わる建築の文献的調査も並行して行っていた。平成3年に大学の近くの足羽5丁目に5代藩主昌親公の御霊屋があることを知った。その調査の際、本堂も見せていただいた。入母屋造、瓦葺きの本堂であるが、入り口の向拝は片流れで、正面の左端に、付き方も変である。内部は3室が1列に並び、中央奥に仏壇があるものの、天井は低く、柱も11.5センチほど



本堂内部 (左：下間、右：入側)



しかなく、間隔もバラバラで整っていない。本堂というよりむしろ住宅の雰囲気漂っている。御住職に尋ねると殿様からいただいたと伝わっているという。

同じように伝わる奥の書院もを見せていただいた。こちらは幅1間半の大床と違い棚を備える10畳の座敷に1間幅の入側が鍵型についている。規模は小さいが、柱は15センチほどあって本堂より太く、天井の棹縁や障子の枠は漆が塗られている。しかも違い棚の小襖の裏紙に「大奥御座之間御棚・・・」とあり、入側境の障子の棧にも「大奥御座之間・・・」の墨書が残っている。この書院は、元は「大奥御座之間」という御殿で、大奥というから藩主に関わる建物であったことは疑いない。

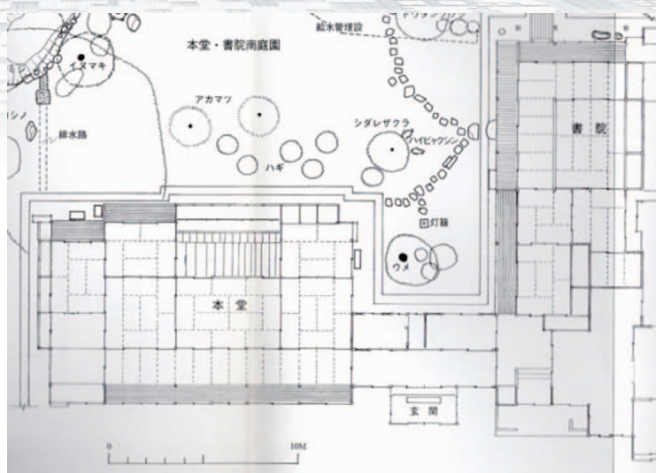


書院内部

日を改めて本堂の平面や構造、柱の痕跡、墨書などを詳しく調査したところ、屋根裏の母屋材の1本1本に「御小座敷」との墨書が見つかった。「御小座敷」とは前身建物の呼称であろう。また中央列の北側の部屋の天井裏の束には「御休息之間短柱」とあり、この部屋が「御休息之間」と呼ばれていたこともわかった。さらに屋根北側の破風板には建築年あるいは修理年と思われる「文政十三年」という墨書もあった。

## 2. 福井城本丸御殿指図の調査

藩主に関わる建物で、「大奥御座之間」や「御小座敷」と呼ばれる建物といえば、福井城内にあった本丸御殿が想定される。「松平文庫」所蔵の本丸御殿図を調べたところ、天保2年(1831)の本丸御殿図の中に「大奥御座之間」、「御小座敷」と付記されている建物がみつかった。ともに御玄関や大番所、鶴の



本堂・書院平面図（『瑞源寺本堂・書院修理工事報告書』より転載）



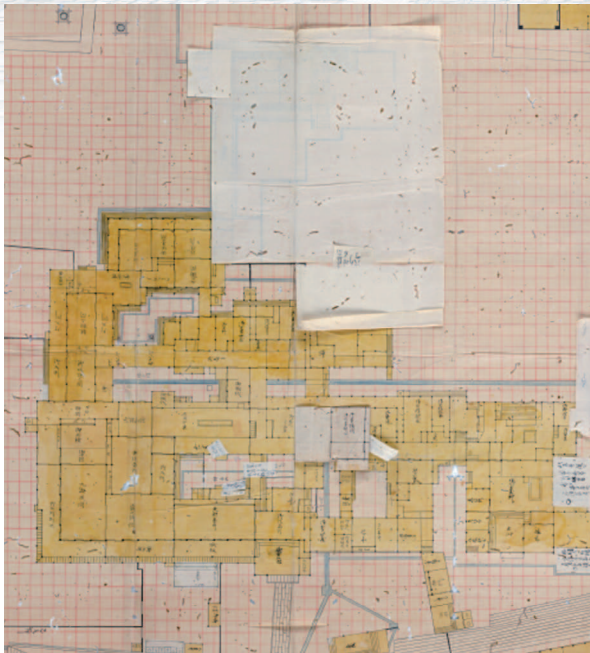
御本丸御殿ノ図（天保年間）  
（福井県立図書館寄託「松平文庫」蔵）

間、広間などいわゆる表向きの御殿の背後（北側）にあって、「御小座敷」は私的な内向きの座敷、「大奥御座之間」はその南側、御座之間から大奥への廊下沿いにある。部屋割をみると、「御小座敷」は中央に8畳間・10畳間・12畳間の3室が1列に並び、その両側に1間幅の入側と半間の板敷の廊下がついている。部屋の広さや西側の入側・縁の構成はやや異なる点もあるが、基本的な構成は本堂に近い。右端の部屋には「御休息之間」ともある。異なる部分は本堂として用いるために改変されたとみてよい。

「大奥御座之間」の方は10畳の広さや大床と違い棚の座敷飾、入側の付き方なども瑞源寺の書院とほとんど変わらない。

しかもこの2棟の建物は13代藩主松平齊承が文政13年(1830)から天保2年(1831)に造営した





御本丸御絵図（嘉永元年）  
（福井県立図書館寄託「松平文庫」蔵）

もの。本堂の破風板の「文政十三年」は「御小座敷」が福井城内につくられた年号であることもわかった。

### 3. 寄附された「不用御立物」

こうして瑞源寺の本堂と書院がそれぞれ福井城本丸御殿の「御小座敷」と「大奥御座之間」であることを突き止めたが、なぜ、これらの建物が瑞源寺に移されたのであろうか。この寺は5代藩主昌親の菩提寺であり、背後に迫る足羽山の中腹に昌親公と母高照院の廟所が祀られている。瑞源寺に残る記録によると、文化10年（1813）1月15日、雪下ろしの休憩中の失火で本堂が焼失し、その後は仮本堂でしのいでいた。万延元年（1860）が昌親150回忌法要の年にあたり、そのために瑞源寺ではその数年前から藩に対して本堂の建設を願い出していた。藩も財政難で、良い返事はもらえずにいたが、万延元年5月5日ようやく本丸にある「不用御立物」を寄附するとの仰せがあった。改めて本丸御殿図を調べると、嘉永元年（1848）の「御本丸御絵図」は「御小座敷」の部分だけ白紙で覆っている。この白紙をめくると、その下に他の御殿と同じように平面が描かれている。当時、「御小座敷」が「御不用立物」であったからこそ白紙で覆われていたのである。さらに瑞源寺の記録の中から「万延元庚申年七月吉祥日、御本丸御小座敷ヲ以奉再建本堂一字」との棟札銘の写しもみつき、ここに現本堂が「御小座敷」を移して万延元年7

月につくられたことを裏付けることができた。寄附の仰せを受けてわずか2か月余のことで、城内からの解体、部材の運搬、当地での工事は急ピッチでなされたのであった。

### 4. 文化財指定と整備

近世のお城といえば、まず最初に天守が思い浮かぶだろうが、最も重要な建物は、藩の政庁や藩主御座所であった本丸御殿や二の丸御殿であった。ところが、全国的にみても城内にあった御殿の遺構例は、二条城二の丸御殿や高知城本丸御殿、掛川城の御殿などごくわずか、これらはいずれも国重要文化財に指定されている。

こうした現況にあって、瑞源寺の本堂と書院は福井城本丸御殿の遺構として、県内はもちろん、全国を見渡しても貴重な歴史的建造物といえる。私が最初に訪れた時には、本堂は建物全体がやや傾き、棟は波打ち、瓦の落下やズレや内陣南側の部屋には雨もりもみられたほどで、再建計画が進行中、新本堂の設計図も出来上がっていた。もう少し出合いが遅ければ、現本堂は取り壊されていたかも知れない。調査後、御住職や檀家の方々へ本堂や書院の文化財的価値や意義を説明し、建設委員会を保存委員会に変更して保存再生の道を模索した。しかし、殿様お手付きのお寺の宿命で、檀家数は30軒余に満たず、寺単独の力では再建整備は不可能であった。一方で、市や県へ文化財指定を陳情し、平成6年に福井市文化財、平成12年に福井県有形文化財の指定を受けた。その後、県と市の補助を得て平成19年～平成21年に本堂の解体修理工事、平成22年に書院の半解体修理工事が行われた。こうして両建物は福井城本丸御殿の面影を忍ばせる建物として甦ったのである。

## おわりに

私の50余年に及ぶ教育活動や研究活動の一端を紹介したにすぎず、タイトルの「プロジェクトX」とは程遠い内容になってしまったことをお詫びしなければならない。日本建築史という過去を対象にしながらの教育や研究にどっぷり浸りきった身から将来に

に向けた新たな思考や技術を生み出すことはできない。

しかし、与えられた環境の中で、努力を怠らず、些細なことでもこれまで以上の成果を上げることプロジェクトといえるのではないか。福井工業大学での学生教育はそのひとつと自負している。知識よりも実務、行動力や人間性の向上に主眼を置き、常に学生と向き合いながらの教育活動であった。その最たるものが小原ECOプロジェクトで、地元の國吉・杉吉両氏や大工の中間父子など多く人たちの協力、援助があってこそその事業であったが、お互いに助け合いながら元気に、活発に、積極的に動き回る、キャンパス内では見慣れない学生たちの姿は今も脳裏に焼き付いている。ちなみに私の卒研生は30余年間で250名を超えるが、平成27年に開催した吉研設立30周年記念パーティーには奥さんや旦那さん、子供さんをつれて120余名の卒研生が全国各地から集まってきた。これも教育活動の成果といえるであろう。

一方、研究面においては、地方の大学、特に私大が都会の大学や国立大学と同等の研究成果を上げる

には環境面でもかなり困難であることを知り、私は研究対象地域を県内、広げて北陸までと限定し、かつ得られた成果は地域に還元する姿勢を貫いた。学生たちと卒研をまとめた「福井の古建築あれこれ」・「越前若狭 古建築探訪」をはじめ、「福井の城」(フェニックス出版1994)、「ふくいの建築」(財団法人福井県文化振興事業団2001)、「福井の城、あれこれ話」(FUT福井城郭研究所2015)、「丸岡城 ここまでわかった！～お天守の新しい知見と謎～」(坂井市文化課丸岡城国宝化推進室2019)などの著書も県内の古建築を少しでも周知させ、そしてこれらを大切に守りつつ、地域の活性化やまちづくりに活かして欲しいとの思いで刊行した。本稿で取り上げた福井城本丸御殿の遺構である瑞源寺本堂・書院は其中でも特筆すべきもので、全国的にみても貴重な福井城本丸御殿の遺構が取り壊しを免れ、往時の面影を蘇らせながら福井県文化財として大切に保存され、活用されている。こうした貴重な建築を守り、伝えることも私のプロジェクトのひとつといえよう。



吉田研究室創立30周年記念パーティー